
君が僕を待つなら～リヒとバッシュの場合～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君が僕を待つなら～リヒとバッシュの場合～

【Zコード】

Z6002M

【作者名】

じゅめのぐるね

【あらすじ】

心配性代表・バッシュさんと

お人よし代表・本田さんが

妹キャラ代表・リヒテンに振り回される話（笑）

ソノイチ（前書き）

今回は「ララ」の兄妹のお話です
あと菊さんもでます！～

舞台は、ギリシャの海辺の港町。
さんさんと降り注ぐ陽光と潮風。 日干し煉瓦で出来た可愛らしい建
物。 全部妄想の街ですが、一応ギリシャの国内つて事に～

リヒテンに彼氏ができた？

お兄ちゃん、そんなこと許しませんからねつ～～～

まあこんなお話。

では、口上がれ

ぎらぎらとした陽光が降り注ぐ7月の下旬のある日のこと

テトラポッドが反射し、その眩しさ故か。海猫がよたよたと危なつかしく舞っていた

「あ、あれを見るのである……！」

「はあ……」

どう考えても真っ青な夏の海と空のコントラストに釣り合わない暑苦しい一人がいた

伏せつて双眼鏡でなにかを一心不乱に観察している

菊とバッシュだ

……ちなみに迷彩柄の軍服で。

「あれはどうみても……そ、そのいかがわしい仲ではないかつ

バッシュは菊の襟首を掴んで噛み付くよつと言つた

冷静な彼らしくない一面だ

「やつみえなくもないですか」

「絶対やつなのである……」

バッシュコは犬歯を剥き出して叫ぶ

きにん、菊は耳を撫でて黒い皿を口黒せせる

「お、落ち着こしてやれこ」

「落ち着こしてこぬこ……」

「ひいくんが?」とシシ「」を入れる間もなくバッシュコは菊の首を強く押さえ付け喰つてこる

「バッシュコやん、呪じこ」

ひぐるぬる

「……バッシュコや」

ハハハハハ

「……バ」

菊は真っ青な空がぼやけてこくを感じながら何故こんな事になつたのかを回想する

本田菊の家の前で我輩は迷っていた

本田にこの非常に重要な問題についての協力を要請すべきか否かを。そつゝうしてこねつちに本田は片手に杓、片手に桶を持つて現れてしまった

水まきにでも使うのだろうか

「それこますといった

我輩は覺悟を決めて話し掛けた

「リヒテンがここ数日間の昼間いないのである」

我輩は冷静に言った

…つもりだつたが多少声が上擦つていたようで本田は少し困惑した
ような顔をした

「リヒテンさんが？何か事件に巻き込まれていてか……」

「いや。それはないと思うのである」

？」

ええい、くや。

伝えたいたい言葉がまとまらずにイラライラする

「ようするに、コヒーレンが…その、洒落た格好でどこかへ行つたから、つまりだな」

本田は田に見えて、”あ、そんなことですか”と言つた顔をした
「遊びに出かけたとかでは？」

「コヒーレンは我輩に何も言わずに遊びになど行かない

「買い物とか」

「重い物を買うかもしれんだろ。いつも一緒に行つてゐる」

我輩はすらすらと前回の事を言つた

全く本田は…何を当然なことを確認しているのだ、今はそれどころではないであつ?

本田はすく微妙な顔で質疑を続ける

「…えーと、それでは。」

「まだ何か可能性があるのであるか

本田は我輩と田が合ひつて改まずげに視線を外した

隠し事が、いい度胸。

「ヤニに直れ本田っ！…なこを躊躇つて居るのか。さつさと吐いた
ほつが身のためだ」

本田は途端に背筋を伸ばし敬礼のポーズをとつて言った

「恐れながら申し上げます…リヒテンベルク…その、データに出
かけたのではないかと」

セダーン

「ひええ…！」

「ほーんーだー…」

ありえない

そんなのはけしかつてあつてはならぬことである、わがわん

「ヤニであるなつ？」

「な、何がですか」

セダーン

本田は、今、耳の上風が通つましたつ」と騒いでいる

「リヒテンベルクが他の男と居るだと。貴様いまそつこつたな

「は、はい」

我輩は息が上がるのも構わずに一息で言つて切つた

「なら共にここ。リヒテンがそんな軽薄な者ではない所、しかと見
せるのである」

本田は一瞬泣きわなな顔をしたが、再び銃を向けるため息をついて両手をあげた

我輩はようやく興奮が収まつてきた

そつだ、なにを恐れる必要がある？

リヒテンが他の男と一緒に過ぐしてこねだと、馬鹿馬鹿しい

そんなことあるはずない

あるはずないのだ。

…やつである、よな…？

○○○○○○○○○○○○○○○○

…ところがで今ここに居るわけです

「バッショウやんつ！」

「コヒが…あ…。す、すまんのである」

「こりかりしてトセー」

「わ、む」

菊はやつと手を離してくれたバッショウを少し責めるよつと奢めた

それにしても。

つい一〇分前を思ひ出して改めてこの状況に思ひを馳せる

リヒテンと青年が並んで海の見回せるベンチに座つてゐのを先に見つけたのはバッショウだった

その時の取り乱しつぶつといつたり

菊はため息をついて、首にくつせつとつてゐるあたりバッショウの指の跡をさする

まあ、私も驚いているんですけどね

なぜならこの青年は

ギリシャだったから。

「一人は何をしゃべつてるのであるか」

「少し遠くて聞こえませんね」

近づくに近づけない

なぜなら一人は迷彩服だったから…ハンパなく計算ミス。
二人の様子は菊からみればそんなにいやいやしてこるのは見えない

肩が触れ合う直前の距離を保ちながらヒテンが時折膝の上において書籍を指差し、ギリシャがゆつたりと頷いている

清いお付き合い。

…ていうか、普通にお友達なのでは…?

菊の素朴な疑問に、しかしバッシュは聞く耳を貸さない

「ヒテンに男の友人などいないのである…」

「わうですか（作りせいの間違いでは？）

こんな具合に。

「しかもヒテン…あんなに可愛い格好をして

「確かに」

菊は双眼鏡を再び覗き込む

リヒテンはベージュ地に華奢な華が染め抜かれた丸首で袖が膨らんだレース素材のワンピースにチームをロールアップにして合わせている

髪には赤いガーリッシュリボンがアクセントになつていて可愛らしさシンプルで飾り気がないが、もともと可愛く、華奢なリヒテンにはよくにあつていてる

「本当に可愛らしい」

「当然である」

バッシュュは、なにを当たり前のことを、とでもいいたげだ

菊の一聲でバッシュュは双眼鏡を即座に覗き込んだ

「手を振りますね」

「帰るのであるか」

リヒテンとギリシャはお別れのキスをするはずもなく

あつさりとそれぞれの帰路についていく

ふと周りを見渡せば薄く広がっていた雲に夕日が映り、美しい夕暮

れを迎えていた

「綺麗ですね…」つわづわ…「

海に落ちかける夕日で心を奪われていた菊をバッシュショはひょいと持ち上げ、立たせた

見た田はあまり体格差は感じていないが、やはり鍛え方がちがうらんからな
「我輩も帰るのである。コヒテンより先に家についていなければな

「やうですか

そつこいながらもバッシュショは睨みつけるよつて菊を見続ける

「バッシュショやん?」

それでも菊は怯えなくて済んだ

なぜならその眼は
迷子の猫のよつであつたから

「本田、その、コヒテンは…」

「ええ、わかつてますよ

菊は少し吹き出しつから海風のよつて穏やかに笑つた

そしてわざとらじこへ真面目な顔を作つて言つた

「リヒテンさんはバッシュュさんのことが大好きですよ。誰よりも。世界中の人が否定しても私が証人になります」

バッシュュは俯いて足元の小石を蹴飛ばした

それから帽子を少しだけ落して菊に表情を読み取らせない角度で

「…つまらなことを言わせたのである。本田、感謝する」

そう言って
踵を返して駆け出した

「ふふふ」

菊は瞳を半分以上沈んでしまった夕陽の色に染めながら笑った

「そんなお礼を言われたら」

今日は朝から殺されかけ、散々連れ回されて、貴重な休日を軍服で
過ごすはめになつた

でも

どうして感謝を伝えたらいいか解らないといった顔で

一生懸命な拙い言葉で礼を言われるのなら

「明日も協力してもいいかな、とか。思っちゃいますよね」

菊は誰もいな夕暮れの港町を鼻歌を歌いながら帰つていつた

ב' כה

「兄様、
ただいまです」

？」

家に帰ると兄様はリビングで本を読んでおられました

「兄様、ご本が逆ですよ」

「…ああ

兄様はぼんやりとした様子で「本を裏返しにしました

そして

「兄様、そのページはちょっと」

「ん？…………！」

「本は私がハンガリーさんにかして頂いたお洋服の雑誌なのですが兄様の開いていたのは「この夏はセクシー・デビュー！？可愛い下着をチラ見せしちゃえ！！」と大きく見出しがかかっていました

「ちが、こ、これはたまたま」

「分かってますよ」

「……む」

兄様がこんなにうひたえるのは珍しくて、私はほけーっとしていました

「それにしてもリヒテン、き、今日はどうへ行つていたのであるか

聞かれると思つていたから、私は用意していた答えを答えるだけよかつたのでした

「買い物をしていました。可愛い洋服があつたので」

「……」

兄様は私をじつと見ていました

私は嘘がばれてしまったのかヒヤヒヤしましたが、兄様がつい、

と視線を外して”そうであるか”と言つたので胸を撫で下ろしました

「兄様、私少し疲れたみたいで。早いけどもつ寝ますね」

朝からギロシヤさんとお話しをする予定ですし、それに

明日は、大切な、大切な日。

「リヒ」

「なんでしょう」

兄様はなにかいたげに口を僅かに開いて、

緩く首を振った

「いや、なんでもないのである。おやすみ」

少し疲れたように微笑んで、それだけを言つて目を伏せてしまいま
した

「おやすみなさい」

私はなんだか心にひつかかるなにかを感じたけれど

明日のことと頭がいっぽいでふわふわとしていたので、そのまま2階へ行こうと扉に手をかけ

少し考えた後で、ふと思いついたままのことを口にしてみた

「兄様は私が可愛い下着がちりりと見える服を着たら、どうおもいますか？」

ズルツ、ドシン

兄様は椅子からずり落ちました

「なああああ？」

「嘘です。おやすみなさい」

私は吹き出しながら2階の浴室へと上っていました

カーテンを引きかけて、あんまり月が綺麗だったので独り言を呟いていました

時々見られる冷静な兄様の笑顔や、困った顔や、今みたいな慌てた顔が大好きです、と。

「おやすみなさい」

月にそう亥いて。

眠りに墮ちる寸前に、夢でも兄様に逢えたらどんなにいいだろうと

そんな傲慢なことを一瞬だけ想つて、眠りに墮ちました

…その頃のバッシュ

「リヒ……！」

そんな格好、ギリシャの前でしたりはせぬよな？

我輩は認めないのである……！

…苦しい夜を過ごしましたようです

「そうして次の日です」

「誰に言つてゐるのであるか」

「いえ、独り言です」

菊とバツ シュは再び晴天の港の樹木の陰に伏せつていた

リヒテンは昨日と同じベンチでギリシャと真剣な顔で話をしている

「今日はなんだか深刻ですね」

菊は隣からの返事を待つ。ついにかわいこまでかかっても返事がこない。

?

横を見るとバツシユは双眼鏡を覗く」ともせずに眉間にしわを寄せていた

「本田」

「はい」

「我輩は少し考えたんだが」

「…あ」

話の途中で菊は小さく声を上げた

バッシュュは条件反射のよつに双眼鏡を手にとった

リヒテンが膝に置いていた紙袋から小さな木箱を取り出した

「なんでしょうか」

「…」

ギリシャは神妙な面持ちでそれを受け取り開けている

リヒテンもその様子を手を組んで祈るよつに手を合わせていた

「ぐぐ

二人は同時に唾を飲み込んだ

そして、出てきたソレは

…。

ギリシャとリヒテンの微笑む顔が酷く残酷なものに思えた

「…」

バッシュは立ち上がり駆け足でその場を去つていいく

「バッシュさんっ！…！」

菊の声は今の彼には届かない

遠ざかる背中を、それでも菊は懸命に追いかけた

しかし一人の距離は開くばかりで。

曲がり角の多い小路でついに姿は見えなくなってしまった

「はあ、はあ…バッシュさん…はあ」

菊は走るのをやめ、肩で大きく息吸つた

途端に頭がぼうつとした

そして突如訪れたのは
自らの無力感への嫌悪で。

菊は傍の田干し煉瓦の壁を拳で叩いた

そのまま壁に重心を預けてなんとか息を整える

「なにかの間違いです」

それにはなんだ。

リヒテンヒガリシャは本当に恋仲であるところのか

「そんな事ありません」

だって

「だって」

そんなの

菊は唇を噛んでもう一度拳を煉瓦に弱々しくぶつかる

「そんなの……報われなずぎやあつませんか」

声は途中から裏返り、掠れた

乾いた田十し煉瓦を濡らしたのは雨ではなく……。

しづらしくして菊はふらりと立ち上がると来た道を引き返す

「しっかりした本田」

意識して背筋を伸ばす

「なにやつてこりのだ、”ワガハイ”はのりまは嫌いだ

バッショの言葉を自分の声に重ねて、最後には走り出す

今の私にはバッショやんを慰める」とはできないでしょ
うけど

まだ私には
確かめなきやならなこと」ことがあります

菊は先程のベンチが視界の果てにいつつた瞬間、さらにスピードを
上げた

○○○○○○○○○○○○○○○○

「色々ありがとうございました」

リヒテンが髪を地面につけるぐらい深くお辞儀をしたから俺は少し
慌てた

「俺はなにもしてない」

「いえ。貴重なお時間をたくさん奪つてしましました」

「んー」

俺は別にどうでもいいけど

リヒテンがいともいなくとも、どっちにしろ毎日このベンチに寝転がって、猫なでたり猫なでたりするだけだし

初めてリヒテンがここに来たときは猫が見知らぬ人に警戒して近づいてこなかつたけど

”「こやー

「うふふ、あなた達もあつがとう

今ではすっかり打ち解けている

笑顔で猫を抱き上げて頬刷りしているのを見ると、和む

「あー、今日なんだよね

俺は小指に嵌まつたソレを抜きながら言った

「はいっ

リヒテンは猫をぎゅうっと抱きしめながら幸せそうに微笑んだ

「リヒテン、猫が…」

”「ふ、ふにゃーーー！」

「…わあ、”めんなさい”」

リヒテンの腕でお腹を強く絞め上げられた猫は急いで俺の頭に上がつて警戒体制をとる

俺は苦笑する

猫と、リヒテン

その両方に。

「ほんとこあいつのことが大好きなんだな」

リヒテンは下を向いて首元のリボンを弄つてから少し頬を染めて困ったよ、『すいません』と謝つた

「なんであやまる?」

俺は心がくすぐられたような気分になった

変なの。

青い青い空を見て、猫を抱いて、波の音を聞いて、眠る

それは俺にとつても大切な、日々の祈りのようなものだ

”幸せ”とはそのことだとわひと思つていたけど

「ギリシャさん?」

「ん...」

自分よりあいつのことを何より一番に考えて、あいつの喜ぶ顔をみ

るために頑張るリヒテンを見てみると

「ああ、そういうのせ
幸せつてこうのかもな、つてさ

なに言ひてさだらうね。俺

「わっ…ギコシヤ、わん?」

「まあまあ。わよつとだけ

俺はリヒテンの細いブロンドの髪を撫でた

驚いたのか、リヒテンが背筋を強張らせる

「へ…はー」

リヒテンはあるで捲闇でも吸ひこむかと思ひて
いる

「いつまつ感情表現になれないのだろうか

俺が思う存分髪をこじへつてると後ろから足音と荒い呼吸が近づ
いてきた

「菊。」

「ギコシヤ、わよつ…あ、コヒトンセ…はあ、はあ。」

「すいじい汗。どうなさいたんですか」

リヒテンがハンカチをだそとかばんに手をかける前に、菊は手の平でそれを制す

すーはー

大きく深呼吸をした後、大粒の汗を拭つこともせず菊は言った

「おー一人に確認しなきゃならないことがあるんですね」

○○○○○○○○○○○○○○○○

我輩はどこがも分からぬままに走つて走つて走つて、気づいたら海辺の寂れた公園にいた

公園と言つても名ばかりで遊具があるわけでもなく、ただベンチと、持ち主を待つスケートボードだけが忘れ去れたようにあつた

「はあ

ベンチには何故か座るのを躊躇い、脇にあつた花壇の植え込みの間に腰掛ける

不足していた酸素が戻つてくると、比例するように先程の光景が網膜を内側から痛めつける

リヒテンがギリシャに渡していたもの

それは、指輪だった

指輪を付けたギリシャがリヒテンを見る眼差しは優しく、

嬉しそうに、本当に嬉しそうにリヒテンは笑った

「我輩はなにをしている?」

我輩は笑った。
自分を。

金がないこと、物がないこと。

そんなのは日常だった

だから失うことには慣れてた

なのに

「弱い」

我輩は自分は他のものより誇り高く、強い存在だと信じていた
だが甘かつた

我輩はたつた一人の大切な者がいなくなつただけで

こんなにも…

こんなにも、胸が乾くのだ

「リヒ…」

「なんでしょう、兄様」

「つー??」

我輩はバランスを崩してアカンサスの花壇に転がり墮ちた

起き上がるにも出来ずにはいる我輩と、何を思ったカリヒテンはし

やがみ込み田線を無理矢理合せた

「菊様からお話は伺いました」

「… そりであるか」

我輩はまともにリヒトーンの顔を見れなくて田を逸らした
そして、無言の空氣に耐え切れなくなつて氣づけば口が勝手に動き
だしていた

「リヒがギリシャの奴と恋仲だったとは、知らなかつたのである。
驚いた。でもその、あれだ。今まで我輩はずつとリヒの事を妹とし
て… 大切に、これでも大切にしてきたつもりだ。だがそれゆえにリ
ヒを束縛しすぎたのかも知れないのである。我輩は… 一人に慣れて
いる、から、我輩の事は気にせず」

心にもない綺麗事を

リヒはその手の平で止めた

我輩は黙るしかなかつた

「兄様、こちらを向いてくださいまし」

我輩は顔をあげたがどうしてもリヒの田をみれなくて、結局再び下
を向いてしまつた

その時、急に衝撃を感じた

「こちらを向け、と言つてゐるんですわっ！！」

リヒテンは我輩の襟首を掴んで無理矢理自分の方に向けたのだ

リヒは泣いていた

あんまり静かに涙だけを流すものだから、リヒは人形だったのか、と少し疑つた

「私がどれだけ兄様のことを大切に思つてゐるか知つていますか？」

我輩は目を丸くした

「貧しくて、今にも死んでしまいそうだつた私を助けてくれました。兄様も同じように苦しんでいたのに、澄ました顔で私に食べ物を分けて下さいました」

リヒテンは表現を変えないまま、ただ淡々と昔話を語る

「ずっと。ずっと傍にいたいと、心からそう思つていたのは我だけだつたのですか？」

リヒテンはそう言つと手を差し出した

我輩はほつけた頭のままにその手を掴んだ

リヒは力強く引っ張り上げた

そして我輩が立ち上がった瞬間

リヒテンはその手を急に離した

我輩は再びアカンサスの花びらを散らすことになった

「つっ…リヒ…？」

「もう兄様なんか知りません。先に帰ります」

リヒは小箱を我輩に投げつけて駆けていってしまった

「…どうこうことなのだ？」

我輩が花びらに埋もれながら空を仰いでいると

「いやここは」とです

「どーも」

「…貴様等見てたのか」

本田がギリシャの手を引っ張つて我輩の前に差し出す

指輪：先程のあれだ

「バッショさん、よくみて」

「む、これは」

我輩は眉を寄せた

ギリシャの指輪には文字が刻まれていたのだ

”s a m p u e”

それは愛の意味を持つ言葉…な訳がない…！

「本田、これまで何が起きていたか説明しろ」

本田は面倒くさげに事件の概要を話した

ギリシャはただの相談相手だった 我輩の誕生日（全く覚えてなかつた）プレゼントを決めるために。

ギリシャはリヒテンの話を聴きつづくつづくつづいていたらリヒテンはそれを同意と取つて、いつの間にかプレゼントはペアリングになつていたという（なんだ…！それ。そしてギリシャ、話くらいまともに聞け、）

そしてサンプルをギリシャがしている理由は…ギリシャの小指と我

輩の中指の太さが同じだから（…。）

話を聞き終わり、我輩はひどい脱力感に襲われた

「つまり、本田。我輩達はいらぬ心配をして駆けずり回つたあげくここに至る、と」

「はい」

「我輩が焦つたのも、昨日一晩中頭を悩ませたのも、全部骨折り損だつた、と」

「私なんか涙までうつかり流してしまいましたよ？」

本田は黒く笑つた

ギリシャがあくびをしながら「ねえ菊、俺もつ帰っちゃダメ？」と言つていた

我輩はなんだか笑えてきて一人乾いた笑い声をあげた

二人は気味悪いモノをみたような表情の顔を見合させ、互いに肩を

竦めて苦笑いをした

三人の疲れた笑い声は寂れた公園によく似合つた

「さて、私はもう帰りますね」

「俺も」

「ああ、迷惑をかけたのである。本田。…ギリシャも、すまなかつた」

「いいえ」「別にー」

そういうつて我輩と本田達は別の道を帰つていく

そうだ、我輩は帰るのだ
むくれたりヒの待つ家に。

「おー、本田、ギリシャーー！」

だいぶ距離が開いてしまったために大声で一人の背中に呼び掛ける

「なんですかーあ」

本田が口に手を当てて間延びした返事を返す

ギリシャも隣であくびの涙を擦りながら振り向いた

我輩は大きく息を吸い込んで

「リヒは…ペアリングの片方を今してると思つかつ？」

と問うた

二人は顔を見合わせ

本田は着物で忍び笑いをかくし
ギリシャは前髪を弄んだ後に

両手で大きな”丸”を描いた

我輩はにやけた顔を隠すために一人に背を向けたまま敬礼をした

港街の夕暮れの風はどこからか懐かしい気持ちを運んだ

そして走り出す

大切な、大切な、
たつた一人の我輩の妹の元へ。

- - - - - Fin - - - - -

ソニー（後書き）

初めてリヒテンとバッシュで書いて見ましたが、皆さん満足いく作品になつたでしょうか？

今回は登場国全員に語り部になつていただきました（笑）

私は菊視点が一番書きやすいのですが…。

”それぞれの幸せ”が今回のサブテーマでした

バッシュはリヒテンがギリシャの元に行くのが本当の幸せなのではないかと悩み、

リヒテンは兄様がいるだけで幸せで、

本田はバッシュの幸せを祈つて涙し、

ギリシャは人への愛が自分への幸せに繋がることに少しだけ感動します。

幸せは難しいテーマです

一人一人、それに違つた幸せがあり、私の求める幸せと貴方の求める幸せがぶつかつたとき、必ずしも一人とも幸せになれるかはわかりませんから。

うーむ、ふかい

そして話がそれてしまつた

とにかくラストで「なんだそのオチは！！」と思つて頂けたなら私
の中では大成功です

つぎはリクエストがあつたのでアルの話を書くとおもいます

では 次作で。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6002m/>

君が僕を待つなら～リヒとバッシュの場合～

2010年10月9日19時00分発行